

「復興支援を目的とした AR 観光バスの開発」

布川博士（ソフトウェア情報学部、教授）、佐藤究（ソフトウェア情報学部、講師）

<要旨>

2000 年に、バス事業に関する規制緩和が行われ、観光旅行の形態の変化や旅行業界の影響もあり、観光バス業界の競争が激化している。このような現状からバス業界が脱するためには、現状の観光媒体という役目から観光資源へと転換することで、新たな需要を生み、解決することができるのではないかとされている。

本研究では、AR 技術を用いて車窓から見える既存の観光資源に対し、情報を付加し、新たな価値を提供するシステムの実装を行う。これにより、観光バスを観光媒体から観光資源に転換することが可能になるとともに、被災地の観光資源を有効に活用することによる復興支援の一助となると我々は考える。

1 研究の概要

2000 年に、バス事業に関する規制緩和が行われた。この規制緩和により、多くの新規事業者や、異種業者が参入することとなった。

しかし、貸切バス事業においては、規制緩和後多くの新規参入があるほか、観光旅行の形態の変化や旅行業界の影響もあり、競争が激化し、バス業界が危機的状況に陥っている。

このような現状からバス業界が脱するためには、現在のこのようなビジネスモデルから大きく転換を図る必要がある。観光媒体という役目から観光資源へと転換することで、新たな需要を生み、解決することができるのではないかとされている。

現在でも観光媒体ではなく、観光資源としての観光バスとしてザ・ライドやレストランバスなどのバスツアーがある。これらはバスを移動手段でなく、ある種の舞台装置としての役目を果たしており、バスで移動するという行為自体が、観光資源であると言える。

しかし、このような魅力的な観光コンテンツを先で述べた業界の状況において、企画を起こすというところから始め、実現、提供するという事は容易なことではない。

そこで本研究では、観光コンテンツの作成の容易化を目的として、AR 技術を用いて車窓から見える既存の観光資源に対し、情報を付加し、新たな価値を提供するシステムの実装を行う。これにより、観光バスを観光媒体から観光資源に転換することが可能になるとともに、被災地の観光資源を有効に活用することによる復興支援の一助となると我々は考える。

2 研究の内容

観光資源としての観光バスとは、普段の観光に用いる“足”である観光バスではなく、観光する際に一緒に楽しめる“モノ”となった観光バスと、本研究では定義する。

我々は、観光バスの観光資源化のためには、ユーザーが、観光バスでの移動を気軽かつ、受動的にも能動的にも楽

しめ、また、バスガイドの能力や天候に依存せず、容易かつ、動的にコンテンツを提供できる手段が必要となると考える。

以上から、本研究では以下の 5 点を実現するサービスである AR 観光バスの実装を行った。

- 映像、画像、テキストなどの情報を作成
- バスの車体に各方向の数か所にカメラを設置
- 各座席設置した端末に情報を表示
- ルート変更や端末の動きへの動的な対応
- バスの移動に応じた、自動的な情報の提供

3 これまで得られた研究の成果

本研究においては、上記の機能提供するシステムの実装を行なった。本システムの構成を図 1 に、利用画面を図 2 に示す。

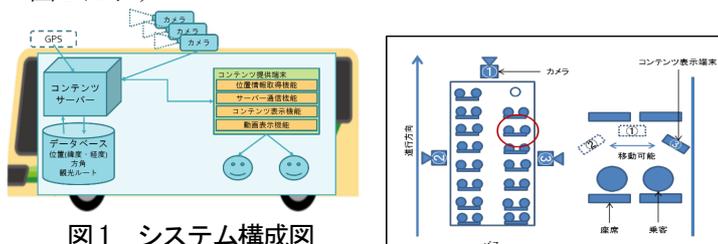


図 1 システム構成図



図 2 利用画面

4 今後の具体的な展開

観光コンテンツの作成の容易化を目的として、AR 技術を用いて車窓から見える既存の観光資源に対し、情報を付加し、新たな価値を提供するシステムの開発を行った。今後については、録画システムの実装を行いながら、調整を行う。また、観光バスで実地での実験を行ない、観光コンテンツとして有効であるか検証していく予定である。